田村市立都路中学校
学校だより 第１６号
令和７年７月１６日（水）
発行責任者：校長　佐藤　仁
TEL：0247-75-2009

めざす生徒像：自らの志を語り、目標に向かって主体的に努力できる生徒
めざす学校像：志を育む学校　　学び合い、高め合う学校　　信頼され、愛される学校

終戦８０年に思うこと②

太平洋戦争における日本人の死者は３１０万人（１９７７年厚生省)、アメリカ軍の死者は１６万人、イギリス軍の死者は８万５千人で、太平洋戦争における死者数は３３０万人以上にのぼります。アジア各国の軍人や民間人の死者を合わせると、２０００万人以上の尊い命が戦争の犠牲になりました。２０００万人以上の尊い命の犠牲があって、今日の日本の安全で平和な社会があると言っても過言ではないと思います。

８０年前の命の重さと現在の命の重さに差はあるでしょうか。時代が変わっても命の重さに変わりはなく、時代や場所を問わず尊いものだと思います。しかし、太平洋戦争に関する本を読んでいると、戦争当時の人の命が軽視されていたのではないかと思わざるを得なくなります。前号で書いた通り、私の祖父は「南方」で死にました。それ以上詳しいことはわかりません。国のために一死を捧げたにもかかわらず、どこで命を落としたのか、どんな死に方をしたのか、息を引き取る時に発した言葉はなかったのか、など、人としての尊厳に関わることが全くわからならい。命が過度に軽視されていたとしか思えません。８０年前、祖父のような死に方をした人が何百万といたことが平和な社会に住む私にはピンとこない。その違和感をなんとかしたいと思い本を読んでいます。

最近、１５歳で日本海軍の軍人として出征した少年兵に関する本（「雪風に乗った少年」西崎信夫著）を読みました。家計を助けるために、そして国のために入隊を決意した１５歳の少年、今なら中学３年生の経験や戦争への思いが綴られています。１５歳の少年にはあまりにも悲惨で過酷過ぎる体験です。トラウマになってしまい戦後数十年が経っても、ふとした瞬間に当時のことを思い出し心が不安定になってしまうそうです。

西崎さんの本を読んでいると、いかに戦争が正常な人間を、残酷で冷酷な人間に変え、狂気に走らせるかがわかります。

> （敵との銃撃戦のさなか）
> 突然、私は開き直ったのだ。
> 恐怖が殺意にかわり、弾を撃つことに快感さえ覚えるようになった。
> 私は人間でなくなっていた。
> 恐怖が殺意にかわった瞬間の感覚がずっと体の中に残っている感じがするんです。７４年たっても抜けた気がしません。

１５歳の少年に殺意を抱かせる戦争、中学３年生の少年に「私は人間でなくなった」と思わせる戦争、人の命を奪うだけでなく、人の心を破壊する戦争に憤りを感じずにはいられません。

西崎さんが戦争を知らない世代に向けて次のように書いています。

> もし自分の子どもや孫が、私のように大義ある戦争だと信じて兵士になり、その尊い命が紙くずのように捨てられたらと、想像していただきたい。
> 戦争は恐ろしく、残酷であり、戦争がもたらすものは悲惨でしかない。
> 夢と希望に満ちあふれた多感な少年たちを二度と戦場に送ることがないように、それが、私の唯一無二の願いであり、体験を語り続けることが、戦争で戦い生き残った私の使命である。

「尊い命が紙くずのように捨てられる」､強烈に心に刺さった言葉です。私の祖父の命も紙くず同然に扱われたのかと怒りや憤りを通り越して切なくなりました。国のためと出征した祖父が紙くずのように散っていった。やるせなさを感じました。生前祖母が見せてくれた写真の中の穏やかな表情をした祖父は、何のためにその尊い命を奪われなければならなかったのか。

戦争を知らない世代の私たちができることは何だろうと考えます。漠然と平和を願うでは足りない気がします。８０年前に何があったのか。太平洋戦争とはどんな戦争だったのか。本を読む、動画を見る、人の話を聴く、どんな方法でもかまわないので、事実を知ること、知ろうとすることが大切かと思います。平和な日本の礎を築いてくれた先人達に思いをはせながら、同じ過ちを二度と繰り返さないために、「事実を知る」努力を続けたいと思います。